

ことばの教室の研究

帯広小学校の目指す子ども像

「自分が好き 友達が好き 学校が好き 帯広の街が好きな帯小っ子」

- (1) 対話を通して互いの考えの違いや良さに気づき、自他の思いを大切にできる子ども
- (2) 集団の中で、自分の良さを生かしながら、友達と信頼・協力できる子ども

研究主題

「自己を見つめ、互いを認め合い、かかわり合う子どもの育成」
～互いの良さや違いを認め合う人間関係づくり～

1 ことばの教室の研究について

(1) 本校の研究との関連（道徳的実践力との接点）

ことばの教室の教育課程は、自立活動に依拠し、一人一人の障がい状態に応じて、その障がいによって生ずる種々の困難を改善・軽減していくことを目的としている。

しかし、ただ単に表面上に表れた障がいや困り感の改善や軽減のみの指導にとどまるのではなく、その先にある「豊かな自己表現」「相手との気持ちの共有」そして「積極的な集団参加（社会参加）」といった道徳的実践力を含めた全人的な発達を促していくことにつながっていくものでなければならない。

(2) ことばのもつ機能と道徳的実践力

ことばは、人が支え合って生きていく上で、気持ちをわかり合ったり共有したりするための手段として、とても重要な役割を果たしている。

ことばのもっている力（役割）には、次のような機能があげられる。

①伝達的手段

自分の思いを伝えたり、相手の思いを受け止めたりといった双方向性のものであり、その土台となるものは相手との気持ちの共有である。伝達機能としてのことばが最終的に目指すものは、「共に生きる」という考え方であると言える。

②思考や記憶を深める

ことばのもつ思考や記憶の力は、相手の考えや意図を汲み取る洞察力として機能する。「違いを認め合う」ためには、違いの中にある接点（共通点）を見つけて歩み寄るなど、より深い洞察力が必要である。

③行動や感情を調整する

行動や感情を調整するためには、自分自身を客観的に見つめる（「自己を見つめる」）ことが必要である。自身の行動や感情をことばに置き換えることで、より客観的に自己をとらえることができ、そのことが自己実現や対人関係の形成にも大きく寄与していく。

これらのことばがもっている力は、本校が目指す子ども像の実現のために、また子どもたちが集団の中で人との関わりを深め、生き生きとした学校生活を送っていくために欠くことのできないものである。

上述したことばのもっている力を育み、最大限に発揮できるように子どもたちを支援していくために、より正確な子どもの見方（理解の方法）や効果的なアプローチ（支援）の方法について、自立活動を通して研究を進めている。

2 研究仮説

本校の研究仮説をうけ、ことばの教室において子どもたちのことばの力を育んでいくために、以下の仮説を設定する。

仮説 1

多方面から複数の視点を取り入れて情報を収集・整理し、子どもへの理解を深めながら関わることで、ことばの力が伸び、豊かな自己表現ができる子どもが育つであろう。

子どもをとらえる視点として、子ども自身の現在の様子だけではなく、どのような発達経過をたどって現在に至ったか、またその中で、周りの人との関わりがどのように影響したかなど、保護者及び学級担任と連携する中で多方面から情報を収集し、より深い子ども理解につなげていきたい。

また、それらの情報を担当者一人で検証するのではなく、通級教室担当者全員で検証することで、さらに子どもへの理解を広げ豊かな自己表現を育むことができると考える。

仮説 2

様々な指導方法を組み合わせてアプローチを行うことで、子ども一人一人のもっていることばの力を最大限に発揮させ、集団の中で人との関わりやコミュニケーションを深め、互いを尊重し合う関係を作っていくことができるであろう。

ことばの教室での指導においては、語彙や表現力といった知識面でのことばの力を高めていく指導のみならず、ことばの土台になるものを培っていく指導、ことばの運用面での力を高めていく指導、更には、子どもを取り巻くことばの環境を整えていく指導など、様々なアプローチが考えられる。指導法を一つに限定せず、子どもの状況に応じて多角的にアプローチを組み合わせていくことで、ことばの力を最大限に発揮し、より積極的な集団参加、そして自己実現と生きる力につなげていくことができると考える。

3 研究の内容

1年目の研究においては、児童一人一人の実態把握を行うにあたり、生育歴や学級集団での様子を含めて、客観的な視点でとらえることができたか、そしてそのことを、児童のことばの力を伸ばすための指導仮説や方針に反映させることができたか、という視点で研修会議やケース会議の場で検証してきた。その中で、「何のために発音指導をするのか」「何のために流暢に話せるようにするのか」「何のためにことばを豊かにするのか」という視点で見た時に、発音の誤りがあるから治す、吃音があるから流暢に話せるようにする、ことばが少ない（少なくともは困るだろう）から増やすといった、大人の側から見た困り感からの対応ではなく、発音が誤っていたり流暢に話せなかったり、或いはことばが少なかったりするために、その子が学級でどんな困り感をもっているのか、という視点を大切にしていけることを確認した。

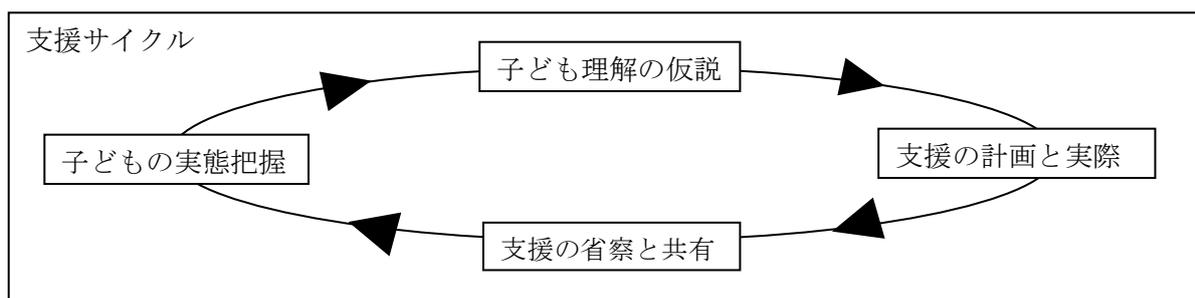
2年目においては、子ども理解の一つとして、当事者としての児童が自身のことをどうとらえ、集団の中でどう感じているのかということ、一対一の関わり（対話）の中で掘り下げていくことにも取り組んだ。同時に、様々な指導方法を個々の児童に応じて効果的に組み合わせることが必要であることを確認した。表面上のことばの部分へのアプローチに偏ることなく、自己のあり方や対人コミュニケーション面及び言語環境面と関連させることで、障がいの軽減にとどまらず、通級指導教室の目標である「豊かな自己表現とコミュニケーションの獲得」につながり、そのことが本校の研究主題である「自己を見つめ、互いを認め合い、かかわり合う子どもの育成～互いのよさや違いを認め合う人間関係づくり～」につながっていくと考える。

3年目においては、まとめの年として、的確な子ども理解を基にした支援の経過を振り返り、指導及び子どもの変化を省みる視点や方法について探っていきたいと考えている。

仮説1にかかわって

的確な子ども理解

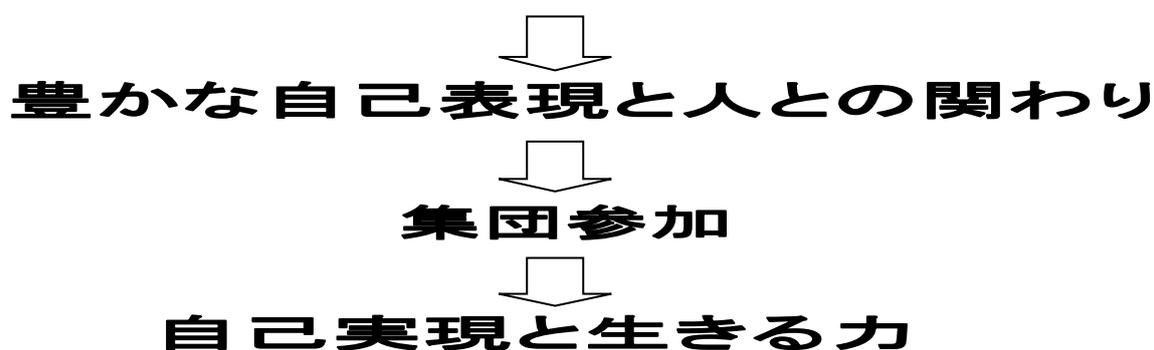
実態把握で得た情報を基に、コミュニケーションにおける困難さや、他者との関係や困り具合、不安や心配などを見取っていく中で、その子どもの発達段階や性格、周囲の人たちとの関わりなどによって変わってくる「その子どもにとっての課題」を明らかにして支援していきたい。同時に支援の振り返り、支援の見直しを繰り返すことによって、子どもの変化を捉え、より理解を深めていきたい。



適切な指導支援

子ども理解を土台にして、表面上のことばの部分へのアプローチに偏ることなく、自己のあり方（自己を見つめ）や対人コミュニケーション面及び言語環境面（互いを認め合い、かかわり合う）と関連させながら、下図に示した個に応じた五つの支援領域におけるバランスのとれたアプローチを引き続き探っていききたい。

支援領域	主な指導項目	道徳との関連
言語の表出面を整えていく指導	<ul style="list-style-type: none">・正しい構音の獲得を促す・楽な話し方の習得・応答する力の習得（補聴器の活用など）	「自己を見つめる」 豊かな国語力
知識としてのことばの力を高めていく指導	<ul style="list-style-type: none">・語彙・表現力・説明する力、類推する力・文字言語（作文、読解）等	「自己を表現する」 豊かな国語力
ことばの土台となるものを培っていく指導	<ul style="list-style-type: none">・経験を広げる・活動を共有する（関わり合う）・相手の言動に耳を傾ける	「互いを認め合い、 かかわり合う」
ことばの運用面での力を高めていく指導	<ul style="list-style-type: none">・行動や気持ちを、ことばや文字で表現する・相手の意図を汲み取る・コミュニケーションマナー	「自己を表現する」 「互いを認め合い、 かかわり合う」
子どもをとりまくことばの環境を整えていく指導	<ul style="list-style-type: none">・話すことへの安心感と意欲・成功体験の積み重ねと自信・違いを認め合う土壌・聞きやすい環境・情報の文字化、イラスト化	※社会モデルとして障がいをとらえた場合、本人に努力を求めるのではなく、環境（人的・物的）に働きかけることも大切な要素である。



ケース会議，事例研究

- ・ケース会議（指導計画会議，指導経過会議，指導評価会議）や事例研究を通して，通級児童全員分についての理解を深め，より良い指導・支援の方法について協議する。

<ケース会議>

・指導計画会議

5～6月に実施する。通級児童一人一人の主訴，生育歴，現症，ことばの課題について
の原因推定，指導仮説，指導方針，指導内容について協議する。

・指導経過会議

10～11月に実施する。計画に沿って指導をすすめ，その経過や子どもの変容等について
て検証する。また必要に応じて指導仮説や計画の見直しを行う。

・指導評価会議

2～3月に実施する。指導経過と子どもの変容について再度検証することで，1年間の
指導の評価を行う。また，スムーズに次年度に引き継げる体制をつくる。

<事例研究>

- ・10月～3月に実施する。指導担当者が実際の指導場面をお互いに参観し，子どもへの働きかけや関わり，使用する教材・教具が子どもの興味関心や実態を反映したものになっているかを検証する。

理論研修，実技研修

- ・教育相談の意義・方法について
- ・心理検査の概要と効果的な活用の方法について
- ・十勝地区言語障害児教育研究協議会主催の研修会への参加の他，特別支援教育に関わる各種研修会に参加して研鑽を深める。